

News Letter

■ 特集記事 1
日本演劇研究コース：
「ヨーロッパバロック演劇舞台・
劇場構造に関する研究会」

■ 特集記事 2
舞踊研究コース：
「ポリシヨイ・バレエ芸術監督
アレクセイ・ラトマンスキー氏を
お迎えして—特別講演
『明るい小川』について」

演劇・映像の国際的教育研究拠点



■ 活動報告
● 日本演劇研究コース P3
● 西洋演劇研究コース P4
● 東洋演劇研究コース P5
● 映像研究コース
● 芸術文化環境研究コース P6
● 舞踊研究コース P7
研究員活動報告 P6
■ 新刊紹介・イベントカレンダー P8
編集後記

特集記事 ① 報告

日本演劇研究コース： ヨーロッパバロック演劇舞台・劇場構造に関する研究会

2008年11月25日(火)～27日(木) 大隈記念タワー地下多目的講義室・302会議室

本拠点では21世紀COEから引き続き、チェコと研究交流をおこなっている。昨年度は日本演劇と西洋演劇の合同チームがチェコに赴き、劇場および文献の調査と日本演劇の講座をおこなったが、今回はその成果を踏まえ、チェコよりパヴェル・スラフコ氏を講師にお招きし、バロック劇場の形成とその構造的な特色についてレクチャーをしていただいた。

南ボヘミア地方に位置するチェスキー・クルムロフは、16世紀の町並みをとどめる世界遺産の町である。スラフコ氏は、町のシンボルであるチェスキー・クルムロフ城の、城内博物館館長を務めている。1766年に城内劇場が完成したが、荒廃した時代があり、1980年代よりスラフコ氏によって劇場の修復・復元の取り組みが始められた。美しく蘇った劇場は現在、多くの観光客が来訪するチェコの有名な観光資源であると共に、現存する数少ないバロック舞台の代表例として、貴重な演劇史料になっている。

ヨーロッパの劇場に関する研究会を日本演劇コースが実施した理由は、チェスキー・クルムロフ城内劇場に見られるセリや宙乗りといった舞台機構が、同時代の日本演劇である歌舞伎のそれに、極めて類似しているためである。会期中通訳と解説を務めてくださったチェコ人の歌舞伎研究者ベトル・ホリー氏(チェコセンター所長)によると、歌舞伎からの影響も考えられるという。日欧の劇場構造の比較が重要な目的であるため、各日スラフコ氏の講演のあとに日本演劇の専門家がコメントを述べ、会場を交えた討論をおこなった。スラフコ氏の講演タイトルと、コメンテーターの詳細は次の通り。25日「チェスキー・クルムロフ城内劇場修復の20年の考察」コメント：賀古唯義氏(文化財建造物修理上級主任技術者)「熊本県八千代座の修復」、26日「17,18世紀の劇場照明：ろうそく芯による照明の実験、バロック時代のイルミネーション考察」コメント：古井戸秀夫氏(GCOE客員教授・東京大学教授)「近代以前の歌舞伎の照明」、27日「マシネリー：チェスキー・クルムロフ城内劇場のバロック時代の技術、歴史的劇場における効果機材について」コメント：竹本幹夫氏(拠点リーダー・演劇博物館館長)「能舞台で舞台装置が発展しなかった理由」。

豊富な記録写真を用いて劇場の構造や修復・復元の過程が紹介されたが、修復・復元は欧州各地に残る3200点以上もの古文獻に基づきおこなわれたといい、極めて緻密である。一方で文献から明らかにならないことは、時として劇場が教えてくれるという。劇場の釘

穴から照明の位置が判明したというが、賀古氏が手がけた香川県金丸座の平成の大改修の際、大梁に残る釘穴から宙乗りの機械「かけすじ」の構造が詳らになったことと通じている。丹念な調査により劇場の構造が明らかになり、演劇そのものの構造も紐解かれる。これらの事例は、劇場保存の意義を示している。

バロック劇場と歌舞伎の芝居小屋は、スペクタクルな演出を可能とする大がかりな舞台転換システム、重りを使うせり上げの機械、波音や雨音を演出する音響効果など、多くの類似点を見出せるが、これらを明らかにすることで、双方の独自性も明快に示された。プロセニアムアーチのバロック劇場に対し、舞台と客席を同一の天井が覆い、花道や宙乗りによって役者と見物が一体化する歌舞伎の芝居小屋。外部の光を一切遮断し、人工的に自然光に近づこうとするバロック劇場に対し、自然光を積極的に取り込む歌舞伎の芝居小屋。これら劇場構造の独自性は、それぞれの演劇構造の根本をも成すものである。

1985年の金丸座における歌舞伎の実験上演と、服部幸雄氏の1986年の名著『大いなる小屋』により始まった、江戸歌舞伎の芝居小屋への興味は、金丸座の春興行の定着を経て、現在では中村勘三郎丈の全国規模の活動などにより、ブームといえるまでの広がりをみせている。古典芸能の劇空間復古の取り組みが、時を同じくしてチェコでも開始されていたことに驚くとともに、約20年を経て両国が結びつき、新たな研究へと展開したことに感慨を覚える。両国の事例を照らし合わせることで浮き彫りになったのは、劇場そのものの特徴はもとより、長い歴史を刻んできた劇場であっても、それを生かすも殺すも当代の人間の手に委ねられているということである。価値が発見され、しかるべき手段で保存・活用され、地域のシンボルとなり、多くの人が集う——チェスキー・クルムロフ城内劇場や金丸座、そして八千代座は、幸福な劇場の例である。歌舞伎座の改築が決定した今、劇場が演劇に及ぼす影響、劇場と地域の関係、劇場保存の意義等、考えるべき課題は多い。(客員研究助手 埋忠美沙)



舞踊研究コース：

ボリショイ・バレエ芸術監督アレクセイ・ラトマンスキー氏をお迎えして —特別講演『明るい小川』について

2008年12月2日(火) 大隈記念タワー地下多目的講義室

舞踊研究コースでは去る12月2日、ボリショイ・バレエ芸術監督アレクセイ・ラトマンスキー氏をお迎えして『『明るい小川』について』と題する講演会を催した。今回、ロシア国立ボリショイ・バレエ団は11月22日から12月14日まで、九州から北海道まで各地で公演したが、その強行スケジュールの直中、ラトマンスキー氏は東京公演初日前夜に、札幌から到着されたその足で会場まで来て下さった。なお、今回の講演会実現にあたってはジャパン・アーツの協力を得た。通訳は佐藤裕子氏(法政大学講師)。

ラトマンスキー氏は1968年レニングラード(現サンクトペテルブルク)に生まれ、モスクワのボリショイ・バレエ学校で学び、キエフ・バレエ、ロイヤル・ウィニペグ・バレエ(カナダ)をへて、1997年にデンマーク・ロイヤル・バレエ団ソリスト、2000年にプリンシパル。その頃から振付家として世界的注目を集めるようになったが、2004年にボリショイ・バレエ芸術監督に就任。

講演は、鈴木晶(GCOE 客員講師)の質問に答える形で、前半はラトマンスキー氏のこれまでの経歴と仕事について話して頂いた。私たち日本人にとってラトマンスキー氏というと、1989年にNHKで放映されたこともあって、キエフ・バレエの花形ダンサーというイメージが強いのだが、「ボリショイ・バレエ学校を出たんだけど、あまり優秀ではなかったの、ボリショイ・バレエには入れなかった」と恥づかしそうに語っていたのが印象的だった。振付は学校時代から試みていたという。若いダンサーに振付をする機会を与えないロシア・バレエ界の古い体質を強く批判する発言が聞かれたことは大変興味深かった。

今回、ボリショイ・バレエは『白鳥の湖』『ドン・キホーテ』『明るい小川』の3演目をもって来日したが、前2作はいわば一般バレエ・ファンあるいは初心者向けの演目であり、ディープなバレエ・ファンや研究者の話題を集めていたのは『明るい小川』だった。講演会の後半ではこの作品に話題を絞ってお話を拝聴した。

ショスタコーヴィチ作曲『明るい小川』は1935年にフォードル・ロプホーフの振付によって初演され、好評を博したが、翌年、ソ連共産党中央機関紙『プラウダ』に批判され、レパートリーから外され、ロプ



ホーフは芸術監督の座を追われた。68年後の2003年、音楽と台本はそのまま、ラトマンスキー氏によるまったく新しい振付をほどこされ、ボリショイ新劇場で初演されたのだった。

『明るい小川』というのは北コーカサス地方の架空のkolhoz(集団農場)の名前で、収穫の季節、モスクワからこの農場に芸術慰問団がやってきたせいで、ドタバタ喜劇が繰り広げられる。物語の中心になっているのは、モーツァルトの『フィガロの結婚』や、シュトラウスの『こうもり』と同じような、妻が夫の不貞を懲らしめるという他愛ない話である。

この作品のリバイバルを提案したのはラトマンスキー氏自身だという。「現在と過去を繋げる」仕事であることを強調していた。氏の振付は、現代作品の多くに見られる抽象性を排除している点が特徴的であり、マイム的な動きが多い。古典バレエのマイムとはまったく違うのだが、動きの具体性を保持している。氏は講演の中でもマイムの重要性を強調し、マイムを極力排したユーリイ・グリゴローヴィチのスタイルを暗に批判していた。ラトマンスキー氏の振付は踊り自体も、ダンス・クラシックを主に使いながらも随所に「ひねり」と「ずらし」を加えている。「新古典主義」と評される所以である。また、ユーモアと「生の肯定」も氏の作品の特徴として挙げられるだろう。実際、『明るい小川』は客席からしばしば笑い声が聞かれる珍しいバレエである。

バレエにとっては何よりも音楽が重要だ、と氏は強調する。氏は特に20世紀ロシア音楽に興味があり、ショスタコーヴィチやプロコフィエフの話になると、「いくら話しても話し足りない」という感じで熱弁をふるっていた。

今回の来日公演の後、ラトマンスキー氏はボリショイ・バレエをやめ、アメリカン・バレエ・シアターのアーティスト・イン・レジデンスに就任し、早くも6月のメト・シーズンでは新作が発表される。アメリカのメディアは「バランシンの再来」と書き立てているが、実際、振付家不在の時代といわれる中、貴重な才能の持ち主として今後とも活躍されるであろうことは間違いない。
(GCOE 客員講師 鈴木晶)

日本演劇研究コース

活 動 報 告

■中国における国際研究集会への参加

―舞台構造の国際比較研究の一環として―

2008年10月19日・20日の両日、山西師範大学戯曲文物研究所主催の国際研究集会「東方戯劇與劇場国際学術検討会」が開催され、拠点リーダーの竹本幹夫他、研究協力者である鈴木英一・神津武男両氏が同大学の招聘により参加・講演した。また本拠点の客員講師である細井尚子氏も研究発表を行い、同じく李墨氏が通訳として同行した。

今回の国際研究集会は、これまでグローバルCOE事業を通じて竹本が行ってきた「舞台構造の国際比較」と重なる点の多いテーマである。また竹本にとっては、別に研究分担者として参加している特定領域研究「散楽の源流と中国の諸演劇・芸能・民間儀礼に見られるその影響に関する研究」の成果発表の一環としての意味もあり、今回とくに「猿楽興行と舞台」と題する研究発表を行い、散楽が舞台を獲得するに至った経緯を、その興行形態との関連を通じて論じた。

(拠点リーダー・演劇博物館館長 竹本幹夫)

■「中国演劇研究者のための中国語講座」・

「中国演劇ワークショップ」の報告

(東洋演劇研究コースと共催)

10月27日から11月6日にかけて全15回の集中講座「中国演劇研究者のための中国語講座」を行った。昨今の中国演劇研究は世界的な展開を見せつつある一方で、各国の文化の成り立ち、社会、歴史背景が相違するがゆえに、着目点、問題意識などにおいては自ずと異なる様相を呈している。このような現象はことに伝統文化に根ざした古典演劇研究の分野において顕著に現れている。外国語に介することなく、中国語で中国演劇に纏わる様々な概念、審美基準を紹介することによって、相互の問題意識を確認し、研究における交流を図ろうとするのは、本講座の趣旨であった。講座の構成としては、前半では演劇のみならず中国の伝統芸術における審美問題、伝承の特質など芸術における一般問題を扱い、後半では代表的な伝統演劇である京劇における諸問題を重点的に紹介した。

具体的な講座内容は、「伝統と体系」(第1回～第4回)、「伝統演劇の基準」(第5回～第8回)、「京劇のキーワード」(第9回～第13回)、「ワークショップ」(第14・15回)、となった。



1月26日から28日まで、関連講座として新たに「中国古典演劇ワークショップ(京劇)」(3回)を企画・実施した。講座では京劇俳優張春祥氏を迎え、京劇の基本的な身体表現、立廻りを中心に行った。最終日は伝統演目「挑滑車」の一部を取り上げた。受講者と講師陣が共同に白眉となる古典演目を作り上げ、学習・体験と鑑賞をかねたこのような中国古典演劇ワークショップは日本における初の試みとなった。(GCOE客員講師 李墨)

■文楽の人形―女方篇―

2009年2月3日(火)15:00～17:00

演劇博物館レクチャールーム



人形浄瑠璃文楽コース研究会では、昨年3月26日に開催した「文楽の人形―立役篇―」(News Letter第2号に活動報告掲載)に続き、今回は、女房人形遣いの桐竹紋寿師、桐竹紋秀氏(左遣い)、桐竹紋吉氏(足遣い)をお招きして、講演及び実演、解説を行なっていただいた。

桐竹紋寿師の講演では、女房人形各役の演技・演出に関するお話のほか、淡路出身である紋寿師ならではの文楽人形と淡路人形との違いについての説明や、淡路の芸能、乙女人形についてのお話、また、二世桐竹紋十郎師に入門して参加した三和会時代から、因会との合同公演、文楽協会設立に到るまでの思い出など、戦後の人形浄瑠璃史にまつわる貴重なお話を伺うことができた。

実演では、女房人形の着付け、姿勢や動作の特徴についての解説に加え、様々な演技を、実際の舞台での早さとスローモーションで繰り返し演じていただき、三人遣いの技術の詳細を間近で見ることができた。左遣い、足遣いの視線と動きを見るため、後ろ向きで演じて下さい、との無理な注文にも快く応じていただき、三人の人形遣いが一体となる高度な技の文字通りの裏側を見せていただいたことは、通常の観劇や鑑賞教室では得られない貴重な体験となった。

(GCOE研究員 小島智章)



西洋演劇研究コース

活 動 報 告

■ 演劇論講座

日時：2008年11月5日(水) 18:00～21:00

演題：南米コロンビアの社会と演劇

場所：大隈記念タワー地下多目的講義室

講師：サンティアゴ・ガルシア氏

(演出家、俳優、劇作家、演劇理論家)

パトリシア・アリサ氏

(演出家、俳優、劇作家、女性演劇活動家)

ガルシア氏には、「集団創作」を選択した劇団テアトロ・ラ・カンデラリアの観点から、アリサ氏には女性演劇の視点からコロンビア演劇について語っていただいた。コロンビア演劇は、日本ではあまり研究が進んでいない分野であるので、本講演は、参加者にとっても新たな刺激となるものであった。

日時：2008年11月25日(火) 18:15～20:30

演題：観客参加型演劇—インプロの魅力

場所：国際会議場第2会議室

講師：絹川友梨氏 (俳優、インプロバイザー、演出家)

パフォーマー：インプロ・ワークス・プレーヤーズ (写真)

インプロ(劇)とは、新しいタイプの観客参加型の即興劇であり、近年急速に関心が高まっている。本講演では、インプロ成立の歴史的な背景と、現在の多彩な展開、そしてコミュニケーション能力の涵養のためにもインプロが活用されている点についてお話いただいた。また、パフォーマーの方々による実演に会場者も参加し、インプロという演劇の新たな形態を、理論と実践の両面から学ぶことができた。



日時：2009年1月22日(木) 16:30～18:00

演題：スタニスラフスキー・システムとロシア演劇

場所：演劇博物館レクチャールーム

講師：岩田貴氏 (早稲田大学客員教授)

本講演では、まずスタニスラフスキーの生涯と当時のロシア演劇界とを、貴重な写真によって概観した。また、スタニスラフスキー・システムを論じた著作の構成や内容をお話いただいた。また「システム」が各国で受容され、大きな影響を与えると同時に、誤解もまた生じたことが指摘され、今後の研究の可能性を示すものとなった。

日時：2009年1月27日(火) 14:40～16:10

演題：ツアー・パフォーマンス『東京／オリンピック』：60年代高度成長期を掘り起こす

場所：演劇博物館レクチャールーム

講師：ピーター・エッカサル氏 (メルボルン大学)

本講演は、PortBによる『東京／オリンピック』(2007)を、1964年の空間を記憶し、批評するパフォーマンス的な言説として読み解くものであった。質疑の後、高山明氏(PortB主宰)からツアー・パフォーマンスの意図するところについて等の、貴重なコメントをいただいた。

■ 「オペラ／音楽劇の総合的研究」プロジェクト(通称：オペラ研究会)

オペラ研究会では、月例研究会を中心に活動を続けている。2009年初めに行われた研究会は以下の通りである。

日時：2009年1月20日(火) 18:15～20:15

題目：『ナクソス島のアリアドネ』における聖と俗

場所：8号館417教室

発表者：野口方子 (GCOE 研究員)

日時：2009年2月6日(金) 16:15～18:15

題目：リブレット作家としてのゴールドーニーオペラ・ブッフア

＜月の世界＞を中心にー

場所：8号館404教室

発表者：大崎さやの (GCOE 研究員)

日時：2009年2月24日(火) 16:00～18:00

題目：ローシー・オペラと浅草オペラ、その〈連続〉と〈断絶〉

——小松耕輔訳『椿姫』を中心に——

場所：8号館104教室

発表者：中野正昭 (GCOE 研究員)

■ シェイクスピア・ゼミ

第6回講演会

日時：2008年11月2日(日) 15:30～17:00

演題：妻の死肉を食らった男の物語

場所：大隈記念タワー 302 会議室

講師：中野春夫氏 (学習院大学教授)

本講演は、これまで『テンペスト』研究で言及されてこなかった新大陸関連の史料、「ヴァージニアの悲劇、妻の死肉を食らった男の物語」が作品の材源の一つである可能性を考察したものであった。この材源の存在が、『テンペスト』に新たな作品像を与えるものであることが明らかにされた。

第7回講演会

日時：2008年12月13日(土) 15:30～17:00

演題：『オセロー』の演劇的エネルギー

場所：大隈記念タワー 302 会議室

講師：篠崎実氏 (千葉大学准教授)

本講演は、劇の構造分析を通して、観客の間でなぜ激しい反応が生まれるのか、を論じたものであった。劇中における、時間の問題、怪物誕生の比喩、ハンカチ、などの問題を分析し、これらが激しい反応を引き起こす要素となりえたことを示すものであった。

第8回講演会

日時：2009年1月31日(土) 15:30～17:00

演題：シェイクスピア時代の古版本と書誌学研究

場所：大隈記念タワー地下多目的講義室

講師：英知明氏 (慶應大学教授)

本講演は、シェイクスピア作品のように、印刷前の原稿が残っておらず、複数の本文が現存する作品の本文復元をどのように行っていくのか、という書誌学研究を扱ったものであった。詳細な実例を交えた興味深い講演は、書誌学研究の重要性を改めて示すものであった。

(客員研究助手 鈴木辰一・村瀬民子)

東洋演劇研究コース

活 動 報 告

東洋コースでは、2008年10月と11月に開催の特別講義において、演劇研究と隣接する語り物芸能と映像の各分野から専門家を講師に招き、また同年12月に京都大学人文科学研究所にて開催した後期定例研究会において、コースで招聘中の黄仕忠先生に共同調査研究による成果の一部を発表頂いた。

■特別講義

日時：2008年10月4日(土)16:20～17:50

講師：大野香織(早稲田大学非常勤講師)

「相声概論」

中国において相声(日本の漫才に相当)は、2005年に北京天橋楽園を拠点としてきた郭徳鋼が全国区の人気者となったことを契機に再びブームとなりつつある。本講義ではこの相声の歴史や基本用語、及び現状について詳細に紹介された。

日時：2008年11月8日(土)16:20～17:50

講師：白井啓介(文教大学教授)



「影戲院という場」—民国期上海映画環境の形成と移民社会

本講義では、中華民国期に中国映画産業の中心地であった上海の映画館を、講師自らの実地調査を基に作成された上海映画関連地図を通じ、その経営形態、建築、設備などの各側面から分析された。また1905年を中国映画元年とする定説への疑義など刺激的な指摘も多かった。(会場は何れも演劇博物館レクチャールーム)

■2008年度後期定例研究会

日時：2008年12月13日(土)14:00～17:00

会場：京都大学人文科学研究所本館第一セミナー室

講師：黄仕忠(中山大学中国古文献研究所所長)

「森槐南、幸田露伴、笹川臨風から王国維まで

—明治期の中国演劇研究」

鼎談「明治期の中国演劇研究をめぐって」：黄仕忠、金文京(京都大学人文科学研究所所長)、岡崎由美(事業推進担当者)

講師は早稲田大学中央図書館等における資料調査を基に、明治時代、早稲田大学や東京大学にて初めて中国演劇を講義した漢詩人森槐南(1863-1911)とその業績を、森と相前後して中国演劇研究に着手した、笹川臨風・幸田露伴・狩野直喜・王国維らの業績と比較しつつ紹介された。現在、日本における中国演劇研究の歴史の中で言及されることの少ない研究者とその業績の紹介に、参加者一同大いに啓発された。鼎談では講師の発表を受け、中国演劇研究における京都学派の定位や明治時代における漢文脈などにつき、活発に議論がなされた。

(客員研究助手 森平崇文)



映像研究コース

活 動 報 告

2008年の年末に、映像研究(映画史)コースの中国プロジェクトでは、中国上海市への出張を行った。中国映画史の研究は中国本国においてこの20年ほどでだいぶ進展してきているが、現在においてもまだ、映画史記述におけるイデオロギー的側面の重視が支配的であり、中華民国時代の映画の記述に関して、1930年代の映画に関する研究がまだ中心を占めている。一方で、外国における中国映画史研究、例えばアメリカにおけるそれなどを見ると、フェミニズム研究の一環として、かなりバイアスのかかった歴史記述が横行している。GCOE映像コースの中国プロジェクトは、こうした中国映画史研究の主要な傾向に対する、ある意味でアンティテーゼ的な立場から、より客観性のある初期中国映画に関する記述の可能性を探るために開始された。

我々は一次資料を徹底的に調査することからこの研究を始めている。しかし当初予想されたように、この一次資料の調査はそれほどたやすくはない。文化大革命において焼却された一次資料の不足は我々の調査のあまりにも大きな障害になっている。また、文書が存在する場合でもすべてのものが公開されているわけではない。資料の閲覧に最も寛大な上海図書館は、映画資料の蔵書量でも中国国内で最大規模ではあるが、ここに所蔵されていることがわかってはいても、閲覧できない雑誌はかなり存在する。基本的に一冊しか現存しない雑誌などは、一般公開を禁じているようだ。

GCOEの開始と同時に、我々は中国映画史の最も知られてい

ない時期、すなわち19世紀末から1910年頃までの中国における映画の状況についての調査を始めた。調査資料としては、同時代の新聞が中心となる。これまでの詳細な調査によって、従来から言われてきた中国映画史の最初期に関する記述における矛盾や疑問点などが浮かび上がってきた。また、近年の中国における記述を見ると、中国映画史をかなり大きな視野によってとらえている。例えば、台湾映画史を中国映画史の一部として扱うというのは、その典型的な記述である。我々は記述対象についての批判的見解を持つところから出発せねばならないと思っている。例えば、そもそも中国で最初に映画が上映されたのは上海であったが、上海は勿論租界であり、初期の映画受容の中心部分は、そこに住む外国人によって担われていたことを忘れてはならない。我々の研究では、中国語の新聞の調査は無論のこと、このような理由から、租界で発行されていた外国語新聞にも目を向けている。こうした新聞に見いだされる映画記事は、中国の初期映画史を全く新たな視点から捉えねばならないことを教えてくれる。それは同じアジアでも、日本の初期映画史とは異なった視野を要求している。

上海図書館の外国語新聞閲覧室は、紙面のコピーを禁じているため、記事はすべて手書きでうつさなくてはならない。このため調査にはかなりの時間と労力がかかっているが、我々は十分な学術的成果を上げることができると確信している。

(事業推進担当者 小松弘)

■ アンヌ＝マリー・オティシエ准教授 (パリ第8大学ヨーロッパ研究所)を迎えて

パリ第8大学ヨーロッパ研究所よりアンヌ＝マリー・オティシエ准教授を招聘し、全三回の研究会を開催した。欧州各国の諸大学や研究機関と連携しつつ欧州レベルの



文化政策研究を進める同氏は、EU文化政策の歴史、多文化社会、文化産業、フェスティヴァルに関する多数の著作で知られている。学内での研究会のほか、日本文化政策学会との共催で年次研究大会内での講演会を催し、国内の多くの文化政策研究者の参加を得ながら、国際学術交流を深化させた。

第1回「EU文化政策の歴史と論点」

日程 2008年12月3日(水) 18:00～20:00

場所: 大隈記念タワー地下多目的講義室

概要: EU加盟国各国の国家レベルの文化政策の多様性について、歴史的背景から個別に詳細な分析を加えたうえで、欧州統合の進展に伴い収束の方向性を見せるEU文化政策の今後の課題が示された。(フランス語逐次通訳つき)

第2回「フェスティヴァル研究の課題」

日程 2008年12月4日(木) 18:30～20:30

場所: 演劇博物館レクチャールーム

概要: 欧州各地で活発に開催される演劇をはじめとする芸術フェスティヴァルの成立背景、変容、地域的課題との関連性について、各国研究者とのネットワークによって実施された現地調査の最新成果を交えながら論じられた。

(フランス語逐次通訳つき)

第3回「グローバリゼーション時代の文化政策」

日程 2008年12月6日(土) 15:20～16:40

場所: 帝塚山大学(奈良) 日本文化政策学会第2回研究大会

概要: 国民国家の枠組み内での文化政策の発展は、数々の現象を前に限界を呈している。グローバリゼーションの進展とともに再検討に付される文化的多様性や、インターネットの発達に伴う創造活動への報酬の問題にいかに対応すべきか。EU内で現在検討されている文化政策上の課題を明らかにし、中南米、アジアなど他地域の地域連合による文化政策構想にも視野を広げながら、文化間対話の重要性の増大と、文化、教育、研究、経済政策の連合による新しい文化的多様性の実現について論じられた。(フランス語逐次通訳つき)

■ 研究会「芸術文化を支える制度」

講師: 小林真理(東京大学大学院准教授・GCOE 客員講師)

概要: 英国の「アーツ・カウンシル」は、「アームズ・レングスの原則」によって決定の独立性が保証され、高い専門性をもつ文化政策策定実施組織であるとして広く知られている。しかしその組織の実態は、まだ日本の文化政策研究者によって明確に把握されているとは言い難い。1946年の設立からのアーツ・カウンシル50年史に登場したさまざまな人物の言説とそれを取りまく社会背景を具体的に描いた文献を講読し、同時代の日本の文化政策の諸問題に照らして検討するゼミ形式の研究会を開催した。来年度も継続予定である。

講読文献: Andrew Sinclair, *Arts and Cultures The History of the 50 Years of the Arts Council of Great Britain*, Sinclair-Stevenson, 1995

実施日程: 第1回 2008年4月25日(金) 15:00～16:00

第2回 2008年5月27日(火) 10:00～12:00

第3回 2008年6月17日(火) 10:00～12:00

第4回 2008年7月25日(金) 10:00～12:00

第5回 2008年9月16日(火) 10:00～12:00

第6回 2009年2月2日(月) 13:00～15:00

場所: 14号館802号室、大隈記念タワー301号室

(客員研究助手 長嶋由紀子)

研究員活動報告

■ IASIL 第32回大会(ポルトガル)にて研究発表

GCOE 西洋演劇研究コース・ベケットゼミのメンバーである片岡昇、景淑英、菊池慶子の3人は、2008年7月28日から8月1日にかけてポルト大学(ポルトガル)で開催されたIASIL(The International Association for the Study of Irish Literatures)第32回大会にて研究発表を行った。IASILはアイルランド文学研究の大規模な国際学会であり、今回はベケットやアイルランド演劇も含め、全体で160を越す発表が行われた。(なお、GCOE事業推進担当者である三神弘子先生も発表者として参加されており、大会中はひとかたならずお世話になった。)

各人の発表タイトルは以下の通りである。

片岡昇 “An Analysis of Irregularity in Beckett’s *Quad*”

景淑英 “The Performing Hands of the Writer: “Separation” in Beckett’s *Ohio Impromptu*”

菊池慶子 “The Sense of Being Human as a Border: Samuel Beckett’s *Film*”

発表後はパネルの司会者や、アイルランド文学の中でも他分野を専門とする参加者からも貴重な意見や感想をいただいた。またベケットはもとより、他のアイルランド文学についての発表も充実しており、非常に実り多い大会であった。

(西洋演劇研究コース・GCOE研究員 菊池慶子)

舞踊研究コース

活 動 報 告

舞踊研究コースでは、平成20年度の現代舞踊プロジェクトとして11月7日(16:30~18:30、演劇博物館レクチャールーム)、暗黒舞踏の第一世代である笠井勲氏と舞踊評論家の石井達朗(慶應大学教授・GCOE客員講師)氏との対談、そして古典舞踊プロジェクトとしては、12月2日(18:30~20:30、大隈記念タワー地下多目的講義室)、モスクワ・ボリショイ・バレエ芸術監督のアレクセイ・ラトマンスキー氏をお迎えし、ロシアバレエの権威である鈴木晶(法政大学教授・GCOE客員講師)氏の質問に答える形式で研究会を行った。

コンテンポラリーダンス・プロジェクト

■ダンスを生きる一舞踏、オイリュトミー、コンテンポラリーダンスを巡って

笠井勲氏は、60年代の舞踏に始まり、その後、長年にわたりオイリュトミーに専念し、90年代にコンテンポラリーダンスで復活を遂げて、現在に至る。笠井氏の驚くほど多彩な活動の、ふだんあまり語られることのない部分に触れながら、対談は非常に活発に進行した。シュタイナー思想とオイリュトミーの研究のために、家族を連れてドイツに数年間滞在したときの研究と生活の様子、シュタイナー思想を今どう考えるか、どのようにして舞踊の世界に入ってしまったのか、暗黒舞踏との出会い、土方巽と大野一雄のこと、70年代に笠井氏が活動の拠点にした天使館のこと、伊藤キムや高橋悠治とのコラボレーションについてなど、笠井氏は熱心に自由に語った。また、対談に付随して、1971年の「丘の麓」という、大野一雄と共演した作品の貴重な映像、また、最近、高橋悠治(ピアノ)の生の演奏による氏



のソロ舞踊の映像なども、一部ではあるが上映した。対談終了後の質疑応答では、コンテンポラリーダンスにおいて技術をどう考えるかなどについて活発な議論が行われた。

バレエ・プロジェクト

■ボリショイ・バレエ芸術監督アレクセイ・ラトマンスキー氏をお迎えして一特別講演『明るい小川』について

講師は、モスクワバレエ学校、キエフ・バレエ、ウィニペグ王立バレエ(カナダ)を経て、1997年よりデンマーク王立バレエ団(終身ソリスト)で活躍されたダ



ンサーで、2000年からは振付家としても大作を発表し続けている。本講演では、7-8年ごとにバレエ団を移籍する理由として、「現状に甘んじることなく新しさを求め前進するため」と語り、また振付に関しては、「バレエのための音楽に限らず、様々な音楽から与えられるインスピレーションを基に作品を作っていきたい」と述べた。これらが彼のバレエ創作の源であると思われる。ショスタコーヴィチ作曲『明るい小川』は、当時のロシア当局の圧政によって1935年初演以後再演されることはなかった作品で、2003年に講師により復元上演された。講演では、初演時の映像が残っていないため、当時の写真や批評、参加した人々の追想録、30-40年代のソビエト時代のバレエ映像などを参考にした点に触れ、またこのようなレパトリーとして消失してしまった作品復元の動機として、忘れ去られていたものを取り上げ、バレエ史を再考する必要性について語られるなど、刺激的な発言が多かった。

なお詳細は本誌「特集記事②」に掲載した。

(客員研究助手 崔柄珠)

■第12回EAJS国際会議(イタリア)にて研究発表

2008年9月20日から23日にかけてイタリア南部のレッツェ(サレント大学)で開催された、EAJS(ヨーロッパ日本研究協会)国際会議に参加した。パネル「Traditional Japanese Theatre at the Crossroads - From the Meiji Period up to Modernity」において「Elements of Nō in Kurosawa Akira's Oeuvre」の題で、黒澤明監督の能の利用を、3本の映画を通じて論証した。

EAJS国際会議は、3年に一度ヨーロッパで開催される、海外における最大規模の日本学の学会である。会期中は言語、文学、歴史、政治、美術、演劇など、13分野の研究発表が同時に進行し、世界中から多くの日本学研究者が参加する大変な盛況であった。発表に対して多くの貴重な意見をいただいたほか、多彩な発表から日本学研究の最新の動向を知ることができた、大変充実した学会であった。

なお本拠点からは他に以下の2名が派遣され、研究発表をおこなった。

カティア・チェントンツェ(日本演劇研究コース・GCOE研究員): パネル「Media and Body: Perspectives on contemporary Japanese Performing Arts」、発表「Listening to the Heartbeat of Contemporary Japanese Performing Arts: Challenges of the Body vis-à-vis Media in Kawaguchi Takao's and Yamakawa Fuyuki's D.D.D.」

埋忠美沙(客員研究助手): パネル「The Printed Stage: Actor Prints and the Production / Reconstruction of Kabuki Plays」、発表「Bakumatsu (Late Edo) Kabuki in Actor Prints」

(日本演劇研究コース・GCOE研究員 マートライ・ティタニラ)

『文明戯研究の現在—春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』

(飯塚容・瀬戸宏・平林宣和・松浦恒雄編著 東方書店 2009年2月発行)

中国の話劇(新劇)は1907年、東京における春柳社の公演を以て嚆矢とする。本書はその100周年を記念して2007年2月3、4日、早稲田大学21世紀COEプログラムにより催された、春柳社並びに文明戯に関する国際シンポジウムにおける日中10名の研究者の発表論文と、公募したGCOE研究協力者・研究員3名の論文から成る。GCOE東洋演劇研究コースから、事業推進担当者・客員講師・研究協力者・研究員の9名が編集・執筆・翻訳をそれぞれ担当した。(客員研究助手 森平崇文)



『超大国アメリカの文化力—仏文化外交官による全米踏査レポート』

(フレデリック・マルテル著 根元長兵衛・林はる芽監訳 岩波書店 2009年1月発行)

本書は、2006年秋にフランス・ガリマール書店から刊行された *De la Culture en Amérique* (アメリカの文化について) の日本語訳である。著者は、フランス大使館文化外交官としてボストンに在住した2001～05年の期間に、アメリカ35州で約700回に及ぶインタビューと文献調査を重ね、「アメリカ型」文化システムの実態をヨーロッパとの比較の視点を交えながら明らかにした。連邦政府による芸術文化政策の歴史と争点を克明に描いた第一部、フィランソロビー、財団、企業メセナ、大学、コミュニティなど文化にかかわる諸組織の機能を分析した第二部から構成される。藤井慎太郎・事業推進担当者(第二章～第四章)、長嶋由紀子・GCOE客員研究助手(第五章～第六章)が、共訳者として翻訳を担当した。

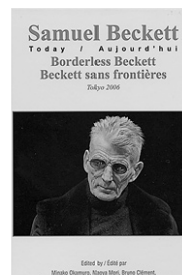
(客員研究助手 長嶋由紀子)



Borderless Beckett/ Beckett sans frontières Tokyo 2006: Samuel Beckett Today/ Aujourd'hui 19.
Eds. Minako Okamuro, Naoya Mori, Bruno Clément, Sjeff Houppermans, Angela Moorjani and Anthony Uhlmann (Amsterdam: Rodopi, 2008).

このたび、オランダのロドリ社より、専門学術誌 *Samuel Beckett Today/ Aujourd'hui* 第19号として、2006年に早稲田大学21世紀COE演劇研究センターと日本サミュエル・ベケット研究会が主催した生誕百年記念国際サミュエル・ベケットシンポジウム「ボーダレス・ベケット」の特集号が刊行された。シンポジウムの実行委員長を務めた関係で、神戸女子大学教授の森尚也氏とともに編集委員に名を連ねさせていただき、アメリカ、フランス、オランダ、オーストラリアという、まさに多国籍軍の編集委員の方々に助けられながら、なんとか刊行にこぎつけることができた。極東の国で開催されたシンポジウムの特集号がオランダで刊行されたこと、ノーベル賞受賞者でシンポジウムの特別ゲストであったJ. M. クツウェー氏の論考を掲載できたことに加え、21世紀COE特別研究生をはじめとする日本の若手研究者たちの論文が厳しい査読を経て収録されたことも、嬉しい限りである。そのうちの何名かは、すでに本学を含む大学の教員となり、活躍の場を広げている。おこがましい言い方ではあるが、本誌が後続の若手研究者たちの励みになれば幸いである。

(事業推進担当者 岡室美奈子)



2008年度 第二回 博士論文成果報告会

EVENT
CALENDAR

開催日：2009年3月16日(月)14:00～17:00 会場：国際会議場第2会議室

タイムテーブル

- ①14:00～15:20 上田洋子(西洋演劇研究コース・GCOE研究員、演劇博物館助手)
シギズムンド・クルジジャンフスキイ研究 提出先：早稲田大学
- ②15:30～16:50 グロスマン・アイケ(日本演劇研究コース・GCOE研究員、フランクフルト大学講師)
Cultural Performance and Collective Identity- Nô Performances in
the Village of Kurokawa-A Case Study 提出先：トリア大学

編集後記

早くも第4号となるニューズレターをお届けします。今号は新たに「研究員活動報告」のコーナーを設け、複数名のGCOE研究員が研究発表をおこなった、二つの海外学会をご紹介します。GCOEに所属する研究員はついに100名を越え、その専門分野は実に多様で、学会発表や論文執筆を初めとした精力的な活動をおこなっています。その成果は、年一回発行の紀要「演劇映像学」や、年二回開催の「博士論文成果報告会」を通じて発信していますが、今後はニューズレターの紙面においても紹介してゆく予定です。研究員の多彩な活躍にご注目ください。

GCOEは4月から3年目に突入します。我々第一期助手の任期は折り返し地点を過ぎましたが、月日が驚くほど早く過ぎてゆくのも、刺激的な環境に身を置いているからでしょう。来年度も興味深い企画が目白押しです。皆様のご参加をお待ちしております。

(客員研究助手 堀忠美沙)

News Letter 第4号

2009年3月15日

編集：堀忠美沙 後藤大輔 鈴木辰一 崔柄珠 長嶋由紀子 村瀬民子 森平崇文

発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL：03-5286-8110

URL：http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html